東北と千葉の出逢いが広がりますように
エン　ジョイ
縁 joy
Vol.90

発　行：認定特定非営利活動法人
ちば市民活動・市民事業サポートクラブ
連絡先：〒261-0011　千葉市美浜区真砂 5-21-12
☎043-303-1688　E-mail npo-club@par.odn.ne.jp
発行部数：2，000 部
福島県から千葉県へ避難されている方の数：1,342 名
（令和 5 年 2/1現在）

支援団体より震災から 12 年経ち、今、思うこと

竹宵の会「にんじんカフェ」前田 陽子さん

東日本大震災の後、福島県浪江町から習志野市に避難し、暮らしていた山田琴子さんが、昨年 12 月に 93 歳で亡くなられました。
震災前は、農協婦人部の会長を務めるなど、活発に活動されていた方で、役職を退いた後は、「隠居部屋」で、田畑の仕事やご近所の方々とのお付き合いなど、活き活きと豊かな暮らしを楽しんでいらっしゃいました。しかし、原発事故で、生活は一変しました。自然豊かな環境と親戚、友人たちとの繋がりを切られてマンションでの暮らしに変わり、「原発事故がなかったら」ともらす場面もありました。そうした中でも「震災を機に、新しい土地で、多くの人たちと出会え、これまでの自分が『井の中の蛙』であることを知った」と周囲に話していた琴子さん。その前向きさに励まされることも多々ありました。
避難者の皆さんの高齢化が進む中、遠出も難しくなっています。近くの場所で気兼ねなく、おしゃべりできる「お食事会」をこれからも続けていきたいと思っています。

千葉大学　ボランティア活動支援学生スタッフ代表　森 優衣さん

私は福島県出身でしたが、幸い東日本大震災で大きな被害に遭うことはありませんでした。
それでも、あの日、あの時のことは今もずっと覚えています。ずっと揺れ続けて収まる気配の無い、死を覚悟した恐怖。連日続く余震。毎日誰かが亡くなるニュース。
12 年が経つ今、もうあのような日々が二度と訪れないようにするためにも、私たちはできることを精一杯していかなければいけません。その為にも、忘れないこと・伝えることが必要だと考えています。
今回のボランティアをさせていただいたことで、避難されてきた方々がどのような想いを抱いているのか、復興までにどのような道のりを歩んだのかを私自身で知ることができました。小さな支援となりますが、少しでも誰かの心の安らぎになっていれば、そして誰かが震災へ思いを馳せてくれたら幸いです。

身体と心の小ネタ 第７４便
自分なりに生きること

春の日にのんびりしていると、４０年も前になりますが、高校2年生の頃を思い出します。父が単身赴任で大阪におり、春休みの宿題を持って大阪に遊びに行きました。昼は父が仕事で、一人で宿題の本を読んでいました。石川達三の「僕たちの失敗」です。感想文を書かなくてはいけないので、普段読む本のように、さらっと読むわけにもいかない。ここは丁寧に読んでいましたが、どうしても主人公の福田信太郎に共感できませんでした。この本はお互い束縛しないように、3年契約で別居結婚をする話です。しかしタイトルにもあるように「僕たちの失敗」につながって行きます。まだ高校2年生の自分には、作者の石川達三の気持ちが理解できなかったのです。
　この間、五木寛之の「折れない言葉」を読んでいると、その中に石川達三の言葉がありました。亡くなるときに残した「人間は誤解されたまま生き、誤解されたまま死んでゆく。」。これを目にした時、ふっと張り詰めた気持ちが解ける気がしました。そして高校2年の自分には、持つことができなかった石川達三に共感した気持ちになりました。皆さんはどうで考えるでしょうか、もしかしたら、自分は他人から誤解されていると考え、苦しくなっている人もいるかもしれません。しかし、そんな誤解を解くことばかり考えず、自分なりに生きていけばいいと、石川達三はそう思っていたのではないかと感じました。

一般社団法人　千葉県公認心理師協会

情報紙「縁 joy」は、福島県県外避難者への相談・交流・説明会事業を活用して
東日本大震災で被災し、千葉県内で暮らす皆様の不安や悲しみが少しでも軽減されるよう
そして、被災者に対しての理解が広まることを願って作成・発行しています。

そごう千葉店にて　写真パネル展開催の報告!!

**忘れない東日本大震災
－あれから 12 年**

3 月 7 日(火)～13 日(月)
そごう千葉店　　地下ギャラリー
（本館とジュンヌ館の連絡通路内）

福島県地元新聞社(福島民報社)の報道写真 31 枚展示

千葉県内の支援団体活動紹介パネル展示

【展示会開催お知らせが「チバテレニュース」で2023. 3. 7放送】
31枚の写真の中には、試験的に再開した漁業に奮闘する男性や、完成した海岸の堤防をいきいきとした表情で歩く小学生を写したものもあり、復興に向けて立ち上がろうとする住民らの姿が写真から伝わってきます。
写真を見た人は－
「(12年で)それぞれの町が必死に頑張っているのを少しずつ忘れかけているような気もするので、自分で何か出来ることを探さないといけないなと思う」と放送されました